

愛知県立芸術大学(以下、「本学」と記す。)では、「教員による自己点検・評価シート(以下、自己点検・評価シート)」を平成 21 年度より実施しています。年度当初に各教員(客員教授を除く専任教員)が各自、「研究活動」「教育活動」「大学運営」「地域貢献」について目標と計画を立て、次年度当初に自己評価をするものです。

22 年度「自己点検・評価シート」は、各教員が年度当初に「目標・計画」を記載し、それをもとに年度終了後「自己評価・実績・特記事項」を記入して提出しました。

以下、学部ごとにそれぞれ、シートの記述について分析した結果を報告します。

■美術学部

美術学部では専任教員(客員教授を除く)48 名中で 41 名の教員が「自己点検・評価シート」を提出しました(回収率 85.4%)。

・研究活動

各教員は「目標・計画」において、それぞれの専門分野における研究テーマを示し、さらに具体的な制作・研究、展覧会(個展・グループ展)、学会活動、執筆、プロジェクトなどについて記述しました。「自己評価・実績・特記事項」については、計画どおり実行し目標を達成したとして半数強の教員が高い評価をしています。目標を達成出来なかったとして低い評価をした教員はわずかでした。

・教育活動

各教員は「目標・計画」において、学部、大学院、他大学での授業科目を列挙して計画を示し、その内容と目標を記述しました。「自己評価・実績・特記事項」において、「概ね目標を達成した」として、7 割程度の教員が中程度の評価をしています。目標を達成出来なかったとした教員はいませんでした。

・大学運営

各教員は「目標・計画」において、担当する各委員会、役目などを記載しました。ほとんどの教員は複数の委員会を兼任し、委員会にまったく関わらない教員はありませんでした。「自己評価・実績・特記事項」において、「概ね目標を達成した」として 7 割程度の教員が中程度の評価をしています。目標を達成出来なかったとした教員がわずかにいましたが、多くの委員会を兼務し全て出席することが無理だったとの理由でした。

・ 地域貢献

各教員は、各種審査委員、学外講師・講演、展覧会企画・運営、サテライト講座、文化財団などの委員、ギャラリートーク（アーティストトーク）、ワークショップなど、様々な形で地域貢献に努めています。「目標・計画」において具体的な記載がなかった教員が少数ですがありました。「自己評価・実績・特記事項」において、高い評価をした教員と中程度の評価をした教員はいずれも4割程度で、ほぼ同数でした。目標を達成出来なかったとした教員はいませんでした。

・ その他

その他の項目は、各自教員がそれぞれに「目標・計画」を示し、自己評価をしました。「目標・計画」での未記入が4割ほどでした。この度の分析の対象からは省きます。

■音楽学部

音楽学部では専任教員（客員教授を除く）36名中32名の教員が「自己点検・評価シート」を提出しました（回収率 88.9%）。

・ 研究活動

自己の専門分野である創作・研究・演奏活動について、「今年の年度計画・目標」との形で具体的な目標・計画設定をおこない、その実績についても客観的・具体的な記述をおこなっている教員が多く見られました。「〇〇〇の創作」、「〇〇作品の発表」、「〇〇への論文発表・掲載」、また「研究発表予定」としてリサイタル、出演演奏会、学会、講座等の具体的な名称、あるいは自己の「研究テーマ」とその実績について、それぞれ各論的に記述されています。実績評価は「計画通り実施した」という記述が最も多数であり、7割程度の教員が高い評価をしています。

・ 教育活動

本学、兼職校における担当授業科目を列挙している教員が大半です。それぞれの科目ごとに、あるいは総論的に、そこでの目標・実績を挙げている記述も数多く見られます。実績欄には学生の学習成果、発達についての記述も見られ、本学における教員の教育活動を具体的に示しています。「計画通り実施した」との記述が最も多く、7割程度です。目標を達成出来なかったとした教員はいませんでした。

・ 大学運営

年度の学務（所属する各委員会）についての記述がほとんどです。計画通り実施し、高い評価をした教員が半数以上ですが、一部、担当委員会が多すぎて会議が重複するため、あるいは委員会そのものの活動が今年度消極的なものであったため、評価を中程度とした教員が見られました。

・ 地域貢献

この項目については、本学の学外交流事業への参加を主に挙げている場合と、教員自身の学外での活動を挙げている場合があり、「本学教員としての地域社会貢献」という考え方についての個人差

が記述に現れていました。大学としての取組みへの参加は「大学運営」の一環として目標設定・評価されるべきであり、また教員個々の「社会文化貢献」には研究領域や職階による大きな個人差があります。それらを前提として、8割以上の教員が中程度以上の評価をしています、「特になし」として達成できなかったとした教員が見られました。

・その他

6名の教員が「自己点検・自己評価に積極的に取り組む」ことを目標としてあげています。これ以外の記述としては学外での研究活動、外郭文化事業への企画参加、学外オーディション・コンクール等の審査などがあり、これらは記述者によって「大学での自己点検・評価」になじまない、と判断されたものです。「本学教員」といういわばブランドによって各教員が諸活動をおこなう意味では、これらも本学教員の活動である、と言えるでしょう。

■総論的な報告事項

「研究活動」については、その成果の発表における観点からの自己評価ということが中心になると思われました。これは学内外からの評価と言うことであり、各人、重要なことであることがわかります。「教育活動」においても多くの実技授業を複数担当しています。”少人数教育”の日々の実践がすべての教員の力によっておこなわれていることがわかります。

「大学運営」においては、教員が複数の委員会を兼務している状態がわかります。それについて懸命に任務を遂行していると判断します。また、一部の教員は専攻（コース）内での業務について触れていますが、実際には専攻（コース）の授業運営や行事・催事の策定・確認・実施の各業務は近年ますます増加しており、これらについての自己点検・評価が求められます。また、入学試験、大学主催演奏会や特別講座の運営等も大学運営活動の重要な一環ですが、これらについての記述がきわめて少数なのは、本学の教員が運営の自覚よりも創作者・研究者・演奏者として、”芸術家集団”の意識により大学運営に取り組んでいることの証左でしょう。

「地域貢献」については、様々な関わりがあり、一律に判断出来ませんが、地域社会から本学にたいして多くの要請があり、今後も関わりが増えて行くだろうと感じられました。今後、芸術文化のことに地域社会における位置づけを視野に入れて、地域貢献の評価を考えて行くべきだと思われます。さまざまな形での地域社会との関わりは、公立大学系の本学にとって大切な要素であり、各教員の活動意識にもあらわれています。

各教員が気負うことなく、また必要以上の謙遜や美化もなく、概ね客観的に自己評価をおこなうことができていると判断しました。「芸術」という研究分野に対し短絡的な成果主義や皮相的な競争原理が働くことなく、各教員が本学という場所で、それぞれの領域において普遍的で独創的な価値、定義化できない美を追求していることが、これらの自己評価につながっていると思います。